



見能林駅の線路を越えた少し先、24段の階段を上ると、地域一帯を見渡せる小高い広場があり、奥には忠魂碑がひっそりとたたずむ。この忠魂碑の周りを毎年清掃しているのが、「石仏クラブ」の皆さんだ。昨年12月8日、階段の落ち葉を掃き、木の枝をせんでいし、広場の草を刈った。「階段が急やけん、清掃するんも大変なんよ」。そう言いながらも、表情は晴れやかだ。

住民の転出入が多い市街地ということもあり、地域のつながりが希薄だった石仏地区。まちをもっと盛り上げたいと、地元の有志が一念発起して、昭和54年に「石仏クラブ」を発足させた。活動は忠魂碑の清掃奉仕に加え、町内美化活動や小学校運動会のお世話など、多岐にわたる。第18代会長を務める森野秋佳さん(63歳)は、「皆で集まって行事に取り組むことで、親睦も深まっています」と話す。発足30周年に制作したお揃いのジャンパーが、その結束力を物語っている。



清掃奉仕を始めたのは、20年以上も前。きっかけは、それまで忠魂碑を管理してきた遺族会の皆さんの高齢化が進み、階段を上り下りしての清掃が難しくなったという話を聞いたことから。「何か地域に貢献したいという思いから、代わりに清掃するようになりました」。森野さんはそう振り返る。「別に誰かに知ってもらわなくてもいい。ただ皆、この地域が好きだからやっていくことなんです。今後はそれを引き継ぐ若者にも加わってもらえたら、うれしいですね」。

今ある遺産や景観を守るだけでなく、先のことも見据えている。忠魂碑前の広場は、万が一の地震発生時には住民の避難場所となるのではないかと、そう考え、古くなった手すりや階段の修理も検討している。地域に伝わる遺産は、地域ぐるみで守り、活用し、そして未来へと受け継いでいく。「石仏クラブ」が長年取り組んできた活動は、地域の理想的なあり方を体現している。